

さいたま市障害者社会参加推進センターだより



ぱらネット

第37号



～共に学ぶ幸せ～

令和元年度障害者社会参加推進事業
家族教室・生活訓練開催



令和元年度 社会参加推進センター開催事業報告

事業名	開催日/場所	参加者数	テーマ・内容等
家族教室開催事業(知的)	7月27日(土) 埼玉会館 ラウンジ	88名	知的・発達障がいのある人の住まいと高齢化 講師:又村 あおい氏 全国手をつなぐ育成会連合会機関紙編集員
家族教室開催事業(身体)	8月3日(土)～ 毎週土曜日全10回 下落合コミュニティセンター 第2集会室	150名 15×10	難聴者・中途失聴者・家族のための手話教室 ～手話を学び、スムーズなコミュニケーションを図る～ 講師:瀧澤 ムツ子氏 さいたま市聴覚障害者協会
家族教室開催事業(精神)	9月8日(日) 浦和コミュニティセンター 第15集会室	66名	今、家族にとって大切なことは… ～精神障がいを持つ人と家族が地域でくらししていく～ 講師:横山 恵子氏 埼玉県立大学保健医療看護学教授
家族教室開催事業(知的)	9月18日(水) 埼玉会館 ラウンジ	51名	新しい働き方をデザインする ～超短時間雇用 IDEA モデル～ 講師:近藤 武夫氏 東京大学人間支援工学分野准教授
生活訓練開催事業(身体)	9月28日(土) 浦和コミュニティセンター 第15集会室	58名	障害があってもありのままに生きたいんです! 講師:矢口 教介氏 筋ジストロフィー当事者 児玉 慶子氏 患者家族から患者本人となる
生活訓練開催事業(身体)	10月6日(日) 埼玉トヨペット(株) 本社3階会議室	66名	和楽器の音色で楽しくあそぼう! 講師:秀氏 AUN Jクラシックオーケストラ 山田 路子氏 AUN Jクラシックオーケストラ
生活訓練開催事業(身体)	10月17日(木) 大宮ふれあい福祉センター 301-303会議室	50名	視覚障害者への意思疎通支援とは? 講師:杉淵 英俊氏 厚生労働省地域生活支援係 鈴木 孝幸氏 神奈川県視覚障害者福祉協会理事
生活訓練開催事業(身体)	10月19日(土) 大宮ふれあい福祉センター 301-303会議室	89名	「聴覚障害者のための特別講演」 ～プラスのエネルギー～ 講師:岡本 かおり氏・TAaKA氏
家族教室開催事業(身体)	11月18日(月) 浦和コミュニティセンター 第15集会室	78名	重度障害者と災害 ～重度障害を持った当事者と家族はどのように災害に対応するべきか～ 講師:斎藤 なを子氏 鴻沼福祉会常務理事
生活訓練開催事業(精神)	11月30日(土) 浦和コミュニティセンター 第14集会室	28名	共に作ろうみんなの輪 PART12 ～よりよい人間関係をつくるために～ 講師:相川 章子氏 聖学院大学教授
家族教室開催事業(知的)	12月22日(日) 浦和コミュニティセンター 音楽室6	80名	大きな声でみんなで楽しく歌いましょう! ～うたごえ広場～ 講師:山田 ちづ子氏 大宮・与野歌声サロン開催
家族教室開催事業(精神)	令和2年1月11日(日) 浦和コミュニティセンター 第15集会室	75名	高次脳機能障害者の社会参加 ～必要な支援・サービスについて～ 講師:曾田 玉美氏 目白大学教授 他当事者3名
家族教室開催事業(身体)	1月28日(火) 大宮ふれあい福祉センター 301-303	63名	肝臓病ってなあに? ～わかりやすい肝臓病のお話～ 講師:渡辺 孝氏 埼玉肝臓友の会会長 井原 金光氏 埼玉肝臓友の会事務局長
生活訓練開催事業(身体)	2月2日(日) 浦和コミュニティセンター 第15集会室	70名	「オストメイトのための医療講習会」 腎臓と膀胱に関わる病気 ～前立腺と尿トラブル～ 講師:宮川 友明氏 自治医科大学泌尿器科医師
家族教室開催事業(精神)	2月23日(日) 浦和コミュニティセンター 第15集会室	70名	精神科医療はどう変わるべきか ～新たな精神保健医療福祉のあり方を目指して～ 講師:増田 一世氏 やどかりの里常務理事

「新しい働き方」 をデザインする

(超短時間雇用IDEAモデル)

さいたま市手をつなぐ育成会

黒澤 篤子

本年度2回目になる家族教室を埼玉会館にて開催しました。講師は東京大学准教授の近藤先生にお越し頂きました。

演題から内容を捉えずらいと
の声が出たが「新しい働き方」を構築して講師との連携で川崎市と神戸市で実践している方です。障害のある人の出来る事だけを見つけて仕事に結びつける。当事者の持っている時間だけ仕事をして賃金を頂く。出来ない事をさせない事。無理な時間まで仕事をしない事。ダブルワークも出来る人だけ可能。

雇用する会社の中の困り事を見つけて細分化して、障害のある人の仕事に結びつけるマッチングする事で短時間雇用に結びつ

ける考え方を提唱されています。今までに無い働き方の提案です。

しかし、現時点では、障害者雇用にかウントされません。

実例を映像で見せて頂き、重度の人にも働き方の紹介を頂きました。

講師のラボと他市との実践を紹介して頂くと会場からさいたま市でも同様な取り組みを希望する声が上がりました。

質疑応答にも丁寧にお返事頂き今後の取り組みに期待します。質問の多くは、さいたま市にも同じ働き方を地域企業や商店街で実践出来ないだろうか？との声が多く出ました。

新しい考え方なので、障害のある人だけでなく、介護する家族のいる方・がんサバイバー・引きこもりの方・ホームレス・貧困層からの脱却の方法と色々な立場の方の働き方の一つになる事を目指している点に大きな魅力を感じました。

生活訓練事業と 家族教室事業

さいたま市聴覚障害者協会

青山 淑子

今年度も「生活訓練事業」と「家族教室事業」を開催しました。生活訓練事業でのテーマは「プラスのエネルギ」で、講師は前回に引き続き、岡本かおり氏でした。パフォーマーとしてTAAKA氏にもお越しいただきました。

岡本氏の講演は、「ありがとう」の言葉で人を思いやる気持ちにさせられたという内容を話してくださいました。

人の悪口を言うことで、仲間との関係がぎくしゃくしている中で、あの仲間がいなかったら、チームは成り立たないという事を認識して、「ありがとう、仲間がいてよかった」ことから、「ありがとう」という言葉が本当によい言葉だと講師はおっしゃいました。

私も「人を思いやることは大切」と思っています。

家族教室事業では前年度に引き続き、中途失聴者・難聴者のための「手話教室」を、開催しました。今回もたくさんの当事者が参加しました。

やはり、ノートテイクも必要だが、手話をもっと覚えたいという思いがあったのでしよう。そういう方たちのためにも、今年度は「手話教室」の回数を増やしたいと思いましたが、予算の関係でできませんでした。

昨年度にはなかった特別講演を企画し、要約筆記者派遣事業を活用してもらえようという講演していただき

ました。中途失聴者・難聴者にもどんどん派遣事業を利用して頂けると良いなと思います。



「精神科医療はどう変わるべきか」

講師 やどかりの里 常務理事 増田 一世氏

「精神科医療はどう変わるべきか」をテーマとした講演会（精神大家族会主催）が2月23日、浦和コミュニティセンターで開かれ、70人が聴講した。やどかりの里常務理事・増田一世氏は、精神医療の問題点、やどかりの里の現状・展望、地域医療のサポートなどについての考えを話していただきました。

精神障害がある人の地域生活を支えている増田氏は「生産性や経済性のない人には生きづらい風潮があります。大切な『価値』は生産性だけではなく、新たな生き方を模索することも必要です」と述べ、日本の精神医療の歴史を学ぶ意味で、全国の患者の処遇を告発した映画「夜明け前」を紹介しました。

■映画「夜明け前」

この映画は、日本の精神医療の先駆者である呉秀三教授の足跡をたどり、現在にも続いてい

る精神医療の問題を探る作品です。日本の精神科病床の多さはどこに起因するのか、考えていく契機となると思います。精神科医・岡田靖雄先生が「自宅監置はなくなっても、今は病院監置ですよね」と語っている。

■「歴史に学ぶ」

増田氏は「歴史は大切。過去を批判するより、理解していくことが今後にもつながります」と話した。「相馬事件」（明治20年）を契機とし、『精神病患者監護法』（明治33年）が成立。この法律は精神障害者を警察署の管理下のもと、「私宅監置」（座敷牢）するのが目的であり、制度は家族に責任を負わしている。『精神衛生法』（昭和25年）が成立。骨子は「私宅監置」の廃止・都道府県立精神病院の設置義務・措置入院と保護義務者による同意入院となっている。

■尾を引く「精神科特例」

国は予算を戦争に使ったため財源不足に陥り、病床数も減少した。公的な精神病院計画が進まず、厚生省は精神病院を作り易いように、医療法の『精神科特例』（昭和33年、医師は一般科の3分の1・看護職は一般科の3分の2）を実施し、民間による精神病床を推進した。経営の安定を図るため、少ないスタッフ、多数の入院患者で病床を満杯にすることにより経営を成立させた。その結果、入院患者は薬物療法が中心となり、長期入院となった。患者に他の選択肢がなく、病院が暮らしの場となった。このような現状は、いまだに尾を引いている。

■「ライシャワー事件」

精神分裂症の青年にナイフで足の太腿を刺されて重症を負ったライシャワー米駐日大使刺殺事件（昭和39年）。この事件により、「全国に百余万人の病質者野放し」という見出しを掲げた新聞報道もあり、社会問題に

もなった。精神科医の岡田先生などが中心となり、『精神衛生法』の改正に向けて議論が展開され、全家連が設立。翌年『精神衛生法改正』が成立。改正内容は、精神衛生センターの設置・緊急入院制度の設置・通院医療費公費負担制度の新設―など。

■「クラーク勧告」拒否

DHクラーク氏は、WHOから派遣され、地域福祉を充実するため、担当者に研修を受けさせ専門性を高めて地域ケアを行うなどの「クラーク勧告」（昭和43年）を日本政府に提言。当時、日本は入院中心の医療体制であり、この勧告を拒否した。

入院患者2人が看護者の暴行で死亡した「宇都宮病院事件」（昭和59年）を契機に、医療の見直しが始まり、『精神保健法』（昭和62年）が制定された。本人の意思による「任意入院」が初めて法制化され、精神障害者社会復帰施設法定化により、やどかりの里のような福祉活動も認められた。

増田氏は「やどかりの里は大

宮厚生病院と連携し、退院後の居場所を考えたい。退院すれば一人の人間として見る。病人ではない。地域の仲間の支えがあれば出来る」「自分を認めてもらうことで回復につながる。当事者が生きたい方向を目指す場にした」と述べた。

□ご意見・ご感想

話の内容に関心が高かったこともあり、多くのご意見・ご感想が寄せられました。

▽精神医療の歴史を聞いて良かった(7人)▽進まない精神医療改革が歯がゆい思い。署名の協力はしているが、「精神科特例」の廃止を早く▽42年の活動に感謝致しこれからもお願いします。家族もどうあるべきか変える

**第8回 障害があってもあたりまえに
生きたいんです!**

去る令和元年9月28日(土)13時半から浦和コミュニティセンター第15集会室にて令和元年度



べきか考えたい▽息子が長期入院中で医師や看護婦の忙しさを面会時にいつも感じる▽変革の声を上げないと今の制度は変わらない。増田氏に頑張っていただきたい。現場からの小さな声を大きくしていけるように応援していきたい▽さいたま市で訪問看護事業の設立を予定している。是非一緒に活動させていだきたいと思う。
さいたま市精神障害者家族会連絡会
鈴木 義男

埼玉県筋ジストロフィー協会さいたま市支部

猪瀬 剛

さいたま市障害者社会参加推進センター生活訓練事業の一環として 埼玉県筋ジストロフィー

協会さいたま支部の『第8回障害があってもあたりまえに生きたいんです!』を開催。約50名の方が参加しました。
今回の講師は2名。矢口教介さん(肢体型筋ジストロフィー) 演題『守られた世界から飛び出して自分らしく笑顔で生きる』矢口さんは栃木県生まれ病院に隣接する特別支援学校で小学校・中等部・高等部を過ごす。29歳の春にさいたま市で自立生活をスタートさせる。今年6月から全国初のさいたま市独自就労支援を利用して就労中も介助を受けながら在宅勤務を継続している経過や決意を話した。
もうひと方の講師は児玉慶子さん(家族性ALS) 演題『家族性ALS』患者家族から患者本人となつて』5歳の時に母親がALSを発症、家族で介護をしながら学生や社会人生活を送るも31歳の時に自身もALSを発症。自立生活の先輩に協力してもらい、現在は実家を出て自立生活を送っている。病気と闘う児玉さんからは生きる強さを



感じました。講演中にお付き合いが毎日を清々と明るく強く生きています。貴重なお話が聞けて有意義な時間でした。また来年度も開催したいと思います。

講師のお二人とも重度で難病を持つている事で大変事も多いが毎日をお姿に感動しました。貴重なお話が聞けて有意義な時間でした。また来年度も開催したいと思います。

和楽器の音色で 楽しく遊ぼう

みつくすビート 神田 正子

令和元年10月6日、みつくすビートとして初めて生活訓練事業を実施しました。かねてからプライベートでコンサートに行っていた和楽器奏者の「鳴り物師 秀一HIDEER」さんと、篠笛奏者 山田路子「さん(AUN Jクラシックオーケストラ)」らを是非ともお呼びしたいと思い付きました。

本来ならばこのような催しに気軽に呼べないような超一流の方々ですが、元輪っふるのWさんの計らいでお声を掛けさせて頂きました。

ところがその日は障がい者週間に当たる日だったことが後で分かり会場の手配や人集めが厳しく、何度もとん挫の危機がありました。

お二人とも多忙な中、打ち合わせもほとんどないままでの大変不安な当日を迎えましたが、70名を超えるギャララーの方々



にお越しただき、時間を忘れる素晴らしい和楽器演奏と障がいがある人もない人も大人も子供も、皆が弾いて楽しめるコーナーを実現することが出来ました。

視覚障害者の 意思疎通支援事業

さいたま市視覚障害者福祉協会 藤崎 明美

今年度の生活訓練事業では、厚労省職員及び神奈川県視覚障害者福祉協会理事長鈴木様を講師に、視覚障害者の意思疎通支援事業に関する勉強会を行いました。

意思疎通支援事業については、地域生活支援事業の都道府県及び市町村必須事業として、地域の実情や利用者のニーズに応じた事業実施が出来ることとなつていきます。

その事業対象には、視覚障害者の日常生活に必須の点訳・代筆・代読・音声訳などによる支援事業なども含まれることになりました。

しかしながら、その取組がほとんど進んでいない状況を知り残念でなりません。

視覚障害者の日常生活において読み書きの支援は欠かせない

ものです。

しかし代読代筆専門のサービスがありません。またその支援に従事する人材もいません。いつでも自宅で手紙や書類を読んでもくれたり代筆してくれるサービスが受けられたらどんなに助かることかと思えます。

一日も早く福祉サービスの必須の事業として代筆代読の支援者の養成と派遣事業が明確になつていくよう視覚障害者当事者として強く働き掛けていかなくてはいけないと感じました。



重度障害者と災害

さいたま市肢体不自由児・者父母の会

泉 千恵子

11月18日(月)鴻沼福祉社会常務理事斎藤なを子氏を講師にお招きし、災害時対策を考える家族教室を開催しました。折しも台風19号による甚大な被害を目の当たりにした直後で、緊張感で張り詰めた会場となりました。

東日本大震災直後から被災地に入られ、その後支援を続けてこられたご経験から語られる、あらゆる困難に改めて障害者の過酷な現実を思い知りました。特に、障害のある人の死亡率が全住民の2倍であったことや、個人情報保護法の壁が支援の妨げになったことは衝撃でした。

障害の状態、家族の状況や環境はさまざまなので、まず「自分の安全確認訓練」を行うことと、公的な「要援護者の個別対応」を求めていくことが大切であると学びました。実態把握、検証作業、障害者の参加による

災害対策づくりが急がれます。

意見交換では、避難所の問題が大きく取り上げられ、終了後のアンケートでも、重度障害者が対応できる居場所の確保を願う声が多数寄せられました。

「水害が起きたとき、家の2階に上がりたいたいけれども、両親が高齢で自分を上げることが出来ない」という車椅子の当事者の言葉が、心に重く残る家族教室となりました。

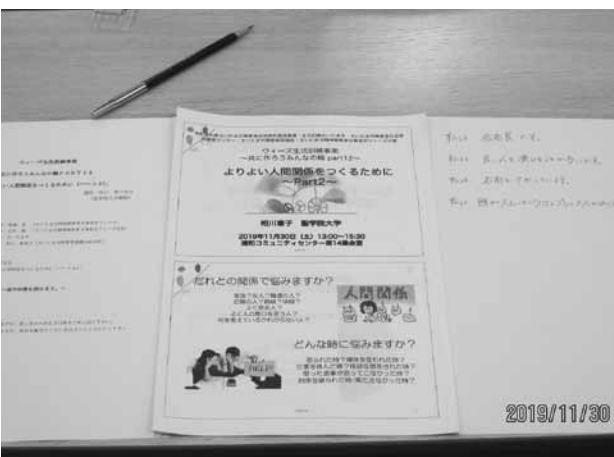


「生活訓練を終えて」

さいたま市精神障害当事者会ウィーズ

稲葉 晃

2019年11月30日(土)浦和コミュニティセンター第14集会所にて、ウィーズ生活訓練く共に作ろうみんなの輪パート12くが催されました。今年も聖学院大学教授の相川章子先生にお越しいただき、テーマは「よりよい人間関係をつくるためにパート2」としました。先生は座学だけでなく、グループワークも交えながら、実践的に教えて下さいます。グループで自己紹介をして、みんなで話すのですが、人にはさまざま側面があつて、「自分も人も知っている私」「自分は知っているけど、人は知らない私」「自分は知らなかったけど、人から見えている私」などがあります。自分で意識していた長所に加え、人から褒めてもらったことで、自分では気付いていなかった長所にも気づくことができました。もう



一つのテーマは「メッセージ」という物です。人と話す時「(私は)こう思う」と一人称で話します。例えば旦那さんのお酒を止めさせたい時「(私は)あなたの体が心配なの」のようになります。私の表現力ではこの辺りが限界ですが、先生には、ここでは書き切れない身の濃い話をしていただきました。有難うございました。その他、さいたま市、さいたま市障害者協議会の関係の方にも本当にどうも有難うございました。

「大きな声で、みんなで 楽しく歌いましょう！ うたごえひろば」

埼玉県自閉症協会さいたま市地区
米山 恵美子

令和元年12月22日(日)さいたま市浦和コミュニティセンター音楽室で開催いたしました。ご自身も歌声ひろばを指導、開催している山田ちづ子氏に講師を依頼しましたら快く承諾していただきました。山田氏の歌声、ピアノ伴奏、そして沖繩の三線の演奏も加わり参加者ともに大変にぎやかに、終わりました。前半は、山田氏の指導のもと季節の歌、懐かしい歌、童謡を中心に歌いあげました。ゲストタイムとして三線のグループの皆さんの演奏で沖繩の音楽を中心に歌いました。三線の独特の音色、笛の音、そして独特の音階にはみな聞き入っていました。最後は大宮アルディージャ手話応援の振り付けをした、大宮ろう学校の先生の手話を付けた歌を教えてください、手話を交えて歌いました。

今回は80人を超える人が集まり、会場の係りの方に定員オーバーの注意を受けてしまうほどでした。近年なかなか人が集まらない状態でしたが、市報を見て来場した人が多かったようです。企画構成も山田氏と相談し、障害者と共に全員大きな声を出して歌い、楽しい時間を過ごせましたこと、私たちの新しい経験になりました。

「肝臓病ってなあに」

わかりやすい肝臓病のお話し

埼玉肝臓友の会 会長 渡辺 孝

NPO法人さいたま市障害難病団体協議会と埼玉肝臓友の会で、令和元年度のさいたま市障害者社会参加推進事業「家族教室」を、令和2年1月28日(火)大宮ふれあい福祉センター3階の会議室で開催した。

「沈黙の臓器」といわれ、重度の肝硬変や肝臓がんに行進してから病院の診察を受けるとい患者も多いため、このような講演会を開催する事により「早期発

見・早期治療」につなげられると考えている。数十年前までは、「肝臓病」といえば過度な飲酒が原因と思われていたが、肝炎ウイルスが発見されてからは肝臓病の大部分は「ウイルス性肝炎患者」といわれるようになった。

毎年、およそ3万人前後の方が「肝臓がん」で亡くなっているが、その7割から8割の方はB型・C型という肝炎ウイルス患者であり、「肝がん撲滅」のためには肝炎ウイルス患者を早期に発見し、早期治療をして重症化させないためにも肝臓病の知識を深めて貰う必要がある。肝炎対策として国は無料で肝炎検査を行える仕組みを作り、治療の助成も出来ている。新薬の開発も進み、肝炎患者の大部分を占めるC型肝炎ウイルスは90%以上陰性化出来る時代になった。しかし、早期発見のための肝炎検査を受ける人が少ないという課題がある。参加者の感想・意見は概ね「分かりやすかった。理解出来た。勉強に

なった。」というコメントが寄せられていた。

編集後記

現在、コロナウイルスが猛威を奮っています。学校や各施設は閉所。イベントや会議も中止に追い込まれています。私たちのふれあい福祉センターも例外ではなく長い間、閉館になっています。この非常時の中で我々になにができるかを考えています。マスクやトイレトペーパーの買い占めは少なくなるともやめてほしいです。

さいたま市障害者協議会でも理事会や三役会が滞っています。この先どうなるんだろう？と不安が増しても仕方ありません。まさに歴史の転換期になったと私は思います。

(竹内 政治)

発行 さいたま市障害者社会参加推進センター

〒330-0801
さいたま市大宮区土手町

大宮ふれあい福祉センター14F
TEL 048-653-7271
FAX 048-653-7341
http://www.saitama-planet.com/
e-mail saitamacity-handynet@bz03.plala.or.jp

発行・編集人 中野 勇